

蓋魚見下文、今按可爲堅魚之義未詳

〔箋注倭名類聚抄八魚〕按說文無鯉鮪字、玉篇鮪魚也、小鮪也、說文鮪魚名、一曰鱈也、鱈鮪也、顧氏蓋依之、蓋當從魚作鱈、而本草白字鱈魚一名鮪魚、故源君引不從魚、然恐非顧氏之舊、鱈即玄鯉魚、下文有本條、不得以充加都乎、按加豆乎是加多字乎之急呼、加多即頑愚之義、本朝月令所引高橋氏文云、磐鹿六獺命、顧舳多追來、即磐鹿六獺命以角弭之弓當遊魚之中、即著弭而出、忽獲數隻、仍號曰頑魚、此今諺曰堅魚、今以角作鈎柄釣堅魚、此之由也、今漁人釣魚、見其群集、則取餌投散其所集海上、魚爭噉之、於是削鹿角爲鈎、隨投隨獲、實如高橋氏文所言、加豆乎之爲頑魚可知也、然則堅魚假借字耳、本居氏云、是魚古皆乾脯用之、如賦役令、大神宮儀式帳、貞觀儀式、及延喜式、稱之皆以斤、可證其堅實過他魚脯、故名曰堅魚、其說亦通、後人作鯉、蓋皇國所製二合字、與鯉鮪字不同、源君不知鯉之爲二合字、以爲唐韻鯉字、然以鯉即鱈魚、非此間所謂堅魚、云未詳以疑之、未之深攷也、按加豆乎、西土無是物、無漢名可充、

〔類聚名義抄十魚〕堅魚 カツチ 鯉 音堅、カツチ、鮪 音奪、カツチ、鱈 音常、カツチ、鯉 カツチ

〔伊呂波字類抄動物〕鯉魚 カツチ 鯛 鱈魚 堅魚 已上同、俗用之、

〔下學集上〕鯉 形、カツチ

〔日本釋名魚中〕鯉 かつをはかた魚也、ほしてかたくなるゆへなり、たとつと通ず、うを略す、

〔貞丈雜記六飲食〕一かつをと云魚は、古はなまにては食せず、ほしたる計用ひし也、ほしたるをもかつをふしとはいはず、かつをと計いひしなり、かつをはかたうを也、ほせばかたくなる故也、かたうを、略して、かつをといふなり、されば古は堅魚と書て、かつをとよみしを、後に鯉の字を作り出したる、俗字なり、朝鮮國にては松魚と云也、松のひでの如く、肉の色赤き故也

〔古事記傳四十一〕堅魚と云魚は漢國の鯉は當らず、加都袁カツチと云名は、加多宇袁カツチの切りたるにて、即